

タイ人の舌打ち

—マルチモーダルインタラクションにおけるその意味—

萩原 孝恵* 池谷 清美**

The Tongue Clicking of Thai People:
Its Meaning in Multimodal Interaction

HAGIWARA Takae* IKETANI Kiyomi**

Abstract

This paper analyzes tongue clicks of Thai people by looking into the data which consists of 2-party interactions (in Japanese), 3-party interactions (in Thai and Japanese) and 2-and 3-party interactions in Thai TV drama. We present an overview of multimodal analysis of tongue clicks, considering facial expressions, gaze, gestures and speech extracted from visual data. Tongue clicks in Japanese language culture are usually described as paralinguistic vocalizations to signal disapproval or irritation. However, our observations suggest that there exists other type of tongue clicks in Thai culture. Specifically, tongue clicks in Thai culture can be divided into two categories: cognitive and emotional. One is used as discourse markers: 1) indexing a new explanation sequence in a conversation or 2) implying that the speaker is still in the process of thinking or searching for what to say. The other functions as expressing positive or negative emotional information such as pleasure or disapproval. The findings of this paper indicate that the Japanese way of viewing tongue clicks is not universal; it is merely one way of interpreting meanings derived from tongue clicks. Data from more languages would be useful to check these findings.

キーワード：タイ人、舌打ち、非言語行動、発話、映像データ

key words : Thai people, tongue click, nonverbal behavior, utterance, visual data

1. はじめに

非言語行動は「言語的な発話と補完し合うことによって統合的な役割を果たす」(高梨2016:62)。本研究は、タイ人の発話にみられる〈舌打ち〉という非言語行動が、言語行動である〈発話〉と、どのように共起しているのかを映像を通して観察することにより、〈舌打ち〉によって表現される、日本語文化に存在しない、そのコミュニケーション上の意味を明らかにしようとするものである。

日本語文化における舌打ちは、一般的に苛立ちを表す不快なものとして捉えられる。それゆえか、日本人は舌打ちという非言語行動に対して敏感に反応するように思われる。たとえば、清(2008:132)が、異文化摩擦の一事例として取り上げているのが、2007年12月1日付けの『スポーツ報知』で報じられた、モンゴル出身力士朝青龍の舌打ちである。記事では、「謝罪直後に報道陣に舌打ち逆ギレ」「記者会見の質疑応答で17回も舌打ち!?!」と、舌打ちがネガティブな態度の現れとして、当時の

* 山梨県立大学 国際政策学部 国際コミュニケーション学科

Department of International Studies and Communications, Faculty of Glocal Policy Management and Communications, Yamanashi Prefectural University

** チュラーロンコーン大学 文学部 東洋言語学科

Department of Eastern Languages, Faculty of Arts, Chulalongkorn University

テレビ番組で検証までされている。¹⁾しかし、日本人にとって舌打ちは常にネガティブなものと解釈されるというわけでもない。その一例は、中京テレビで放送されている『太田上田』という番組でMCを務める爆笑問題太田の、話し始めるときの舌打ちであるが、番組編集スタッフにはこの舌打ちが気になったようで、「気になる癖」として番組内で取り上げられている。太田の舌打ちは、心理アナリストによって「気合を入れる、スタートの号令をかけるような意味合い」²⁾のような舌打ちであると説明されている。しかし、太田本人は、番組で指摘されるまで、自身が舌打ちをしていることには全く気付いていなかったと述べている。前者は「舌打ち逆切れ」とネガティブな非言語行動の現れと解釈された舌打ち、後者は「気合」「スタートの号令」として、ある意味ポジティブな非言語行動の現れと解釈された舌打ちの事例である。

舌打ちのような非言語行動は、心理的な側面から解釈されることが多いが、本研究では、冒頭で挙げた高梨(2016)の見解を視座とし、舌打ちの生起環境をマルチモーダルに捉え、その意味・機能を分析する。分析するデータは、タイ人の三者会話の映像と、タイのドラマの映像である。これらの映像データの分析を通して、タイ人の発話に伴う舌打ちの「マルチモーダル性」を検討する。坊農・高梨(2009:16)は、「マルチモーダル性」について次のように説明している。

マルチモーダル性 (multi-modality) とは、音声や視覚といった単一の表現モダリティを研究対象にするのではなく、複数のモダリティの間の統合を研究対象とするときに新たに浮かび上がる性質を指す。

(坊農・高梨2009:62)

2. 舌打ちに関する研究

萩原・池谷(2015, 2016, 2017)は、タイ人日本語学習者の発話に舌打ちが「頻繁に、繰り返し現れる」ことに注目し、100名のOPI (Oral Proficiency Interview) データ³⁾を基に、舌打

ちの出現位置や生起環境から、タイ人の舌打ちの意味・機能、舌打ちによる感情表出や認知行動について明らかにしてきた。そして、日本語文化に存在しない、タイ語話者に特有の非言語行動として、またパラ言語行動として、その特徴を具体的に記述してきた。

しかし、本研究で着目している舌打ちのような、いわゆる非語彙要素は、データの書き起こしの段階で聞き流されてしまったり、価値のないものと判断されてしまったりする可能性がある。「ドイツ語話者日本語学習者話し言葉コーパス」を例に挙げると、このコーパスには非言語行動の記載は一切みられない。しかし、言語によって舌打ちは、当該言語のコミュニケーション・スタイルを理解する上で重要な知見を提供する資料となり得る。たとえば、森田(2015:172)は、フランス人の舌打ちは「コミュニケーションを続けたいという気持ちの表れ」であり「ポジティブなもの」であると述べ、その用法を5つに分類している。

- i. 情報処理/言語表現処理 (情報そのものを検索したり、表現や文法を考え発話を整えたりする際に表出する舌打ち)
- ii. 境界設定 (ここから場面が転換するという境界をマークする舌打ち)
- iii. 発見 (間投詞に似た用法で使用される舌打ち)
- iv. 発話権の取得・維持 (すべて発話頭に出現し、「えー」で置き換えられる舌打ち)
- v. 感情表出 (日本語と同じ不快な感情を表出する舌打ち)

(森田2015:165-171)

森田(2015)によるi~vのフランス人の舌打ちと、萩原・池谷(2015, 2016, 2017)が明らかにしてきたタイ人の舌打ちとを検討してみると、森田(2015)が挙げているv「感情表出」の「不快な感情を表出する舌打ち」については、いずれの言語にも存在する、通言語的な舌打ちの用法であるといえる。また、i~ivのフランス人の舌打ちの用法については、名称・分類・分析の観

点に違いはあるものの、萩原・池谷 (2015, 2016, 2017) がこれまで分析してきたタイ人の舌打ちと、類似した用法であるといえる。しかしタイ人の舌打ちには、森田 (2015) のフランス人の舌打ちの用法に挙げられていないものがある。不快な感情表出ではない「感情表出」の舌打ちである。本稿では、これまでその存在に言及のない、この不快な感情表出ではない舌打ちを取り上げる。

3. 研究概要

3. 1 分析の観点

本研究において分析の視座とする高梨 (2016) は、発話と共起する非言語行動について「ジェスチャーなどの非言語行動と『統合』されることが重要である」と指摘している。高梨 (2016) の見解を具体化したものが図1である。

高梨 (2016) は、図1にみられるように、発話には横軸と縦軸の2つの文脈が伴っていると説明している。高梨 (2016:63) は「言語行動、非言語行動とも、着目している行動が統合と連鎖のそれぞれの軸の上でどのような関係を持っているかを突き止めることがマルチモーダル分析の核心」と述べている。

萩原・池谷 (2015, 2016, 2017) がこれまで行ってきた舌打ちの分析は、発話における出現位置、生起環境を視座としてきた。これは、高梨 (2016)

の下記図1を援用すれば、テキストと音声の2つの情報を通して横軸にあたる「連鎖的關係」を検討してきたといえる。本研究がこれから目指すのは、縦軸にあたる「統合的關係」も含めて舌打ちと舌打ちが出現した発話を分析することである。ただし、ここで留意しなければならないのは、舌打ちはジェスチャーというカテゴリーから外れる点である。

安井・杉浦 (2019:5-6) は、ジェスチャーについて、次の3つを例示し説明している。

- i. 形と意味が社会的慣習によって恣意的に決まっているエンブレム (emblem) と呼ばれるジェスチャーがある。
- ii. 社会的慣習によって取り決めがあるものの、意味は文脈・状況によって異なるジェスチャーとして、直示的ジェスチャー (deictic gesture) がある。
- iii. 描写的ジェスチャー (depicting gesture) と呼ばれるジェスチャーで、形と意味の間に慣習的な関係がなく、最も自由度の高いジェスチャーである。

(安井・杉浦2019:5-6より抜粋引用、筆者付番)

舌打ちは、言語行動か非言語行動かで二分する場合には、非言語行動に分類されるが、安井・

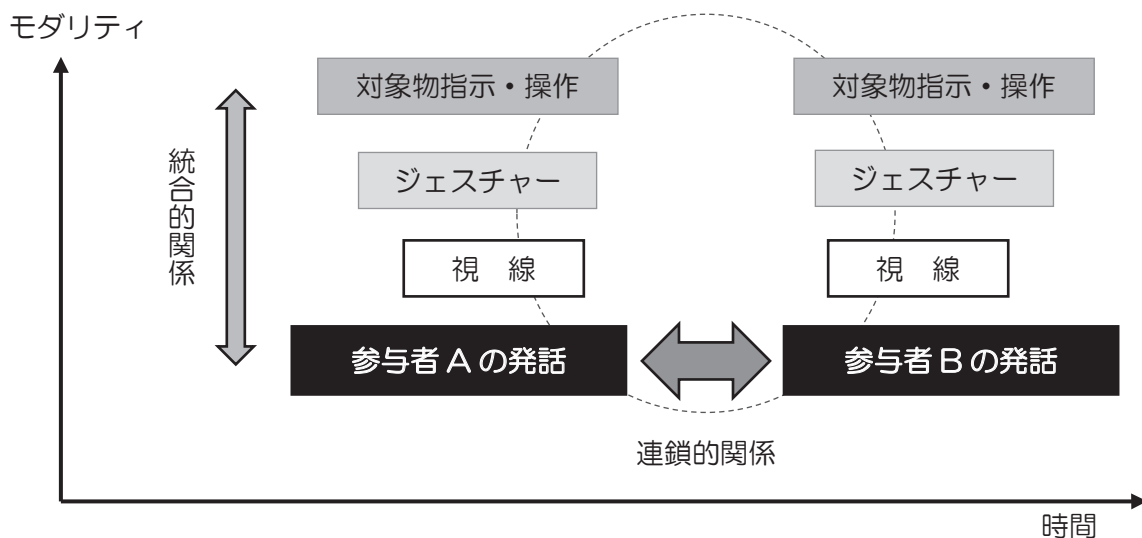


図1 高梨 (2016:62) 「インタラクション⁵⁾における連鎖的關係と統合的關係」

杉浦 (2019) が提示している上記のようなジェスチャーの 카테고리には入らない。また、高梨 (2016) が図1で非言語行動として挙げている「表情」や「視線」にも入らない。舌打ちは、言語行動か非言語行動かといえれば非言語行動であるが、発話に付随して現れるといった特徴がある。舌打ちに語彙の意味はないが、感動詞に近い機能を有している (萩原・池谷 2015, 2016, 2017)。Ward (2006) は、舌打ちを非語彙要素と分類している。舌打ちは、言語行動の中で生起するという特徴がある。そこで本研究では、下記図2のように、舌打ちは言語行動 (発話) に付随するモダリティーとして捉え検討する。

図2は本研究における分析の観点である。図2は前出した高梨 (2016) の図1を基に、研究対象とする舌打ちが横軸と縦軸という2つの文脈の中で、どのように共起し、どのような意味で使用されるのかを図示したものである。本研究は、これまで行ってきた連鎖的關係から得た知見と研究成果を視座とし、タイ人の発話にみられる舌打ちの「モダリティー性」を記述する。

3. 2 分析データ

本研究では、次頁の表1に示す3種類の映像

データ (A. 三者会話、B. 二者会話、C. タイのドラマ) で観察された舌打ちを取り上げ、マルチモーダルの観点から検討する。

3. 3 データ収録に関する手続きと研究倫理

会話の収録においては、収録前に調査協力者に説明を行ったうえで、書面にて承諾を得ている。当該書面は、双方が保管できるように同じものを2通作成し、調査協力者に1通ずつ渡している。ただし、舌打ちに注目していることについては、調査の段階では伝えていない。映像データの取り扱いについては、ドラマ映像では出所を明記し、会話映像では会話参加者の記号化およびイラスト化により個人が特定できないよう配慮し、提示する。

4. 日本語に存在しない舌打ち

本研究では、次頁の表1に示す3種類の映像データ群から、発話に共起した舌打ちを抽出し、舌打ちが観察された発話と、舌打ちのモダリティー性を考察するための非言語行動 (ジェスチャー、視線、表情) をマルチモーダルの観点から考察する。4.1では、認知行動系の舌打ちを、4.2では感情表出系の舌打ちを取り上げ、日本語に存在しない、タイ人の舌打ちの用法を明らかにする。

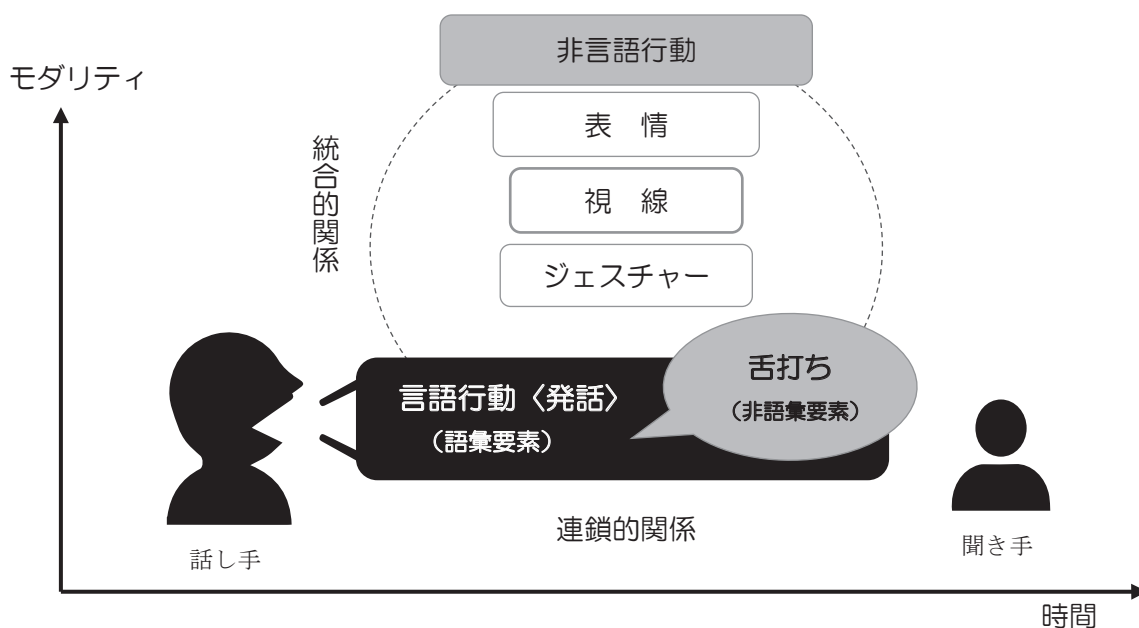
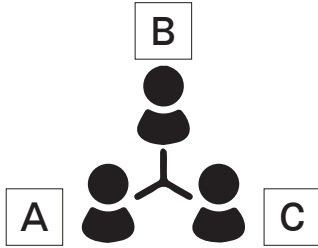



図2 発話に共起する〈舌打ち〉のマルチモーダル分析の観点

表1 データ概要

| A. 三者会話の映像 | |
|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ■ 三者会話 5組、各組約50分 ■ 参加者の関係性 友人(大学生のグループ、元大学院生のグループ) ■ データ収集 2016年11月、タイで収録 ■ 会話内容 課題遂行型タスク(3種類の会話) <ol style="list-style-type: none"> 1) 課題遂行のための話し合い テレビ番組の企画で300,000バーツが当たった。そのお金はどのように使ってもよいが、条件が2つある。①1週間で全額使い切らなければならない。②使い方に意味がなければ全額返金しなければならない。 2) 課題解決のための話し合い 実行した企画がテレビで放映された。審査の結果、そのお金の使い方は意味がないと判定されてしまった。選択肢は2つある。①300,000バーツを返金する。②返金しなくてもいい方法を探す。 3) 振り返り 2つのタスクを行った感想を自由に話す。 ■ 使用言語 1) タイ語、2) 日本語、3) 日本語 ■ 収録状況図 |  |
| B. 二者会話の映像 | |
| <ul style="list-style-type: none"> ■ 二者会話 2組、各組約30分 ■ 参加者間の関係性 教師と学生 ■ データ収集 2017年3月、タイで収録 ■ 会話内容 雑談 ■ 収録状況図 |  |
| C. テレビドラマの映像 ⁶⁾ | |
| <ul style="list-style-type: none"> ■ タイトル 『บุพเพสันนิวาส (bùpphee-sǎn-níwâat/ブPPER・サン・ニワート)』 英題: Love Destiny、邦題: 愛の運命 ■ チャンネル チャンネル3 ■ 放送期間 2018年2月21日～2018年4月11日(週2、水・木) ■ 放送回数 全15話 ■ 放送時間 20:20～22:45頃 ■ あらすじ ドラマの主人公は、現代のタイで歴史を専攻する学生ゲースラーン(เกศสุรางค์)。彼女は、アユタヤの遺跡から帰る途中、交通事故で命を落としてしまうが、アユタヤ時代の女性ガーラゲーに遭遇し、心だけがガーラゲー(การะเกด)に移った状態で、ゲースラーンの心を持ったガーラゲーは、そのままアユタヤ時代に戻る。現代の女性ゲースラーンがまるでアユタヤ時代にタイムスリップしたかのような形で話が進んでいく。アユタヤ時代の女性ガーラゲーの悪行を、現代の女性ゲースラーンが善良な方向に変えていく歴史コメディドラマである。主人公は、現代の女性ゲースラーンと、アユタヤ時代の女性ガーラゲーの二役を演じている。 | |

4. 1 認知行動系の舌打ち

【1】「考えるとき」に出現する舌打ち

テレビドラマの映像から、「考えているとき」に観察された舌打ちを紹介する。舌打ちが観察された状況は、次のようなシーンである。

《状況》
 主人公は現代のタイで歴史を専攻する大学生。交通事故で命を落とすが、あの世でアユタヤ時代の女性の体に入ってこの世で徳を積むようお願いされ、アユタヤ時代に来る。この世に戻れたものの、アユタヤ時代とはわからず、時代を探る。歴史の知識を使い、年代を特定しようとしている。

舌打ちが観察された発話の生起環境を可視化すると、図3-1のようになる。横の矢印は時間軸に基づく発話の流れで、舌打ちの生起環境を記述している。縦軸では舌打ちが出現した発話に共起

する非言語行動のモダリティの統合関係を記述している。

図3-1で発話の連鎖をみると、舌打ち直前の生起環境にフィラーの「えー」が現れている。舌打ち直前のフィラーは、萩原・池谷(2017)の研究結果から、次のような認知行動の現れとして説明することができる。つまり、舌打ちは、舌打ち前の「話す内容を考え込んでいる」状態から、「何とか話そうとしている」状態へと、舌打ちを契機に認知行動が変化することを示す非言語行動であり、舌打ち前には内部状態を表すフィラーが共起しやすいという現象である。また、図3-1の縦軸に注目してみると、当該舌打ちが発話の生起環境からだけでなく、図3-2・図3-3の視線・表情・ジェスチャーといったモダリティの側面からみても、「考えるとき」に使用される認知行動であることが明示されている。図3-2は舌打ち時、図3-3は舌打ち後の映像の静止画である。

| | | | | |
|-------|--------|-----------|------------|-----------------------------|
| モダリティ | 表情 | 考えている様子 | | |
| | 視線 | 前方、少し上向き | | |
| | ジェスチャー | | | 左手の人差し指で右の手のひらを指し、数えるようなしぐさ |
| | 発話 | ナーラーイ王、えー | 舌打ち | 仏歴何年かなあー？ |
| | | 時間 → | | |

図3-1 「考えるとき」の舌打ちの生起環境とモダリティ



図3-2 舌打ち時：考えている様子⁷⁾
 (『บุพเพสันนิวาส』第2話より)



図3-3 舌打ち後：話し始める様子
 (『บุพเพสันนิวาส』第2話より)

【2】説明する前に出現する舌打ち

三者会話の映像から、「説明する前」に観察された舌打ちを紹介する。舌打ちが観察された状況は、次のような話し合いの場面である。

《状況》
日本語で話をしている。
30万パーツを返金しなければならないとわかり、学生にとっては自力では難しいと考え、一人がスポンサー探しを提案している。しかし、会社に依頼をすると宣伝のため会社のロゴを使わなければならない等、具体的な問題点を話し始めている

舌打ちが観察された発話の生起環境を可視化すると、図4-1のようになる。横の矢印は時間軸に基づく発話の流れで、舌打ちの生起環境を記述している。縦軸では舌打ちが出現した発話に共起する非言語行動によるモダリティの統合関係を記述している。

図4-1で発話の連鎖をみると、Cの発話に共起した舌打ちは、「わかるけどーお」とAの話のいったん受け入れた後に舌打ちをして、舌打ち後に「この前、」と言いだしてから、もう一度「この前は」と助詞の「は」を提示することにより、これから話題に入ることを提示している。そして、沈黙に続いて、説明が始まっていることから、舌打ちの前の発話と舌打ち後の発話を通して、舌打ちを契機に変化している認知行動が示唆される。つまり、「説明する前」に出現する舌打ちも、前出した【1】の「考えるとき」の舌打ち同様に、認知行動の現れと捉えることができる。また、図4-1の縦軸に表記した、発話に伴うモダリティを図4-2・図4-3で確認してみると、視線は直前に話をしていたAの方を向き、あごに手を当て肘をついて聞いていた状況から、舌打ち後はあごの手がはずれ、手を前に差し出して説明している様子に変化している。この一連の行動から、舌打ちが萩原・池谷（2017）が説明してき

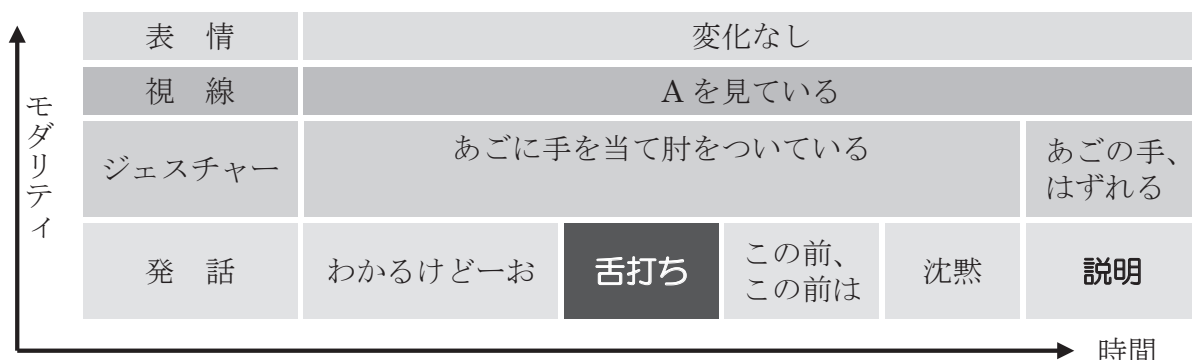


図4-1 「説明する前」の舌打ちの生起環境とモダリティ



図4-2 舌打ち時：発言を受け入れる様子

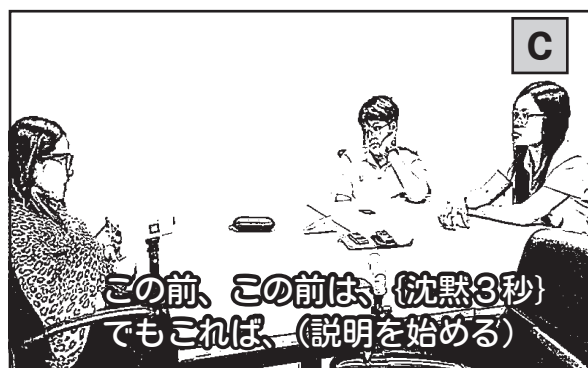


図4-3 舌打ち後：説明を始める様子

た「検討中からの脱却」という契機となっていることが窺える。したがって、この舌打ちも認知行動系の舌打ちであると判断することができる。図4-2は舌打ち時、4-3は舌打ち後の映像から切り取った静止画をイラスト化したものである。

4. 2 感情表出系の舌打ち

【1】「いい考え！」表明の舌打ち

タイ人の舌打ちは、「いい考えがひらめいた」ときにも使用される。三者会話の映像から、「いい考え！」を表明するときに観察された舌打ちを紹介する。舌打ちが観察された状況は、次のような話し合いの場面である。

《状況》
 タイ語で話をしている。
 いろいろな案を出すか、3人それぞれがやりたいことが違って、まとまらない。

舌打ちが観察された発話の生起環境を可視化すると、図5-1のようになる。横の矢印は時間軸に基づく発話の流れで、舌打ちの生起環境を記述している。縦軸では舌打ちが出現した発話に共起する非言語行動によるモダリティの統合関係を記述している。

図5-1で発話の連鎖をみると、Bは「すごく意味あるよ」と言うまでは、AとCを交互に見ながら共話的に話を進めているが、Aの「その村民の就職支援にもなるしね」という発言直後に舌打ちをして、同時に指を立てて満足そうな表情でCを見て、鼻の下に指を当てている。この一連の発話の様子をイラスト化したものが図5-2・図5-3である。この舌打ちの場合、その生起環境にフィラーの出現や話題の提示が観察されないことから、検討中からの脱却といった認知行動の表出ではなく、舌打ち直後の満足げな表情から、感情表出系の舌打ちと解釈できる。

| | | | | |
|-------|--------|---------------------------------|-------|-------------|
| モダリティ | 表情 | | | 少し微笑み満足げな様子 |
| | 視線 | 交互に見ている | Aを見る | Cを見る |
| | ジェスチャー | 手を前方に置く | 指を立てる | 鼻の下に指を当てる |
| | 発話 | B:すごく意味あるよ A:その村民の就職支援にもなるしね | 舌打ち | どう？ |
| 時間 → | | | | |

図5-1 「いい考え！」の舌打ちの生起環境とモダリティ

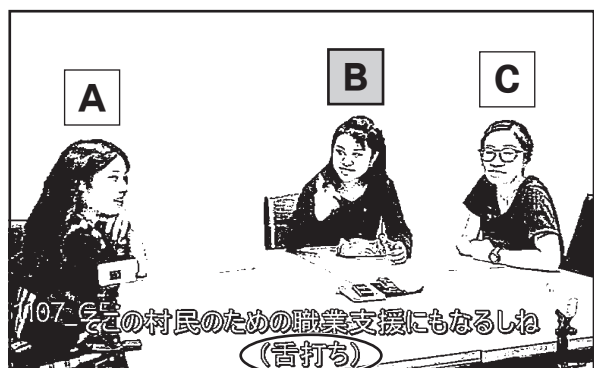


図5-2 舌打ち時：人差し指を立てる様子

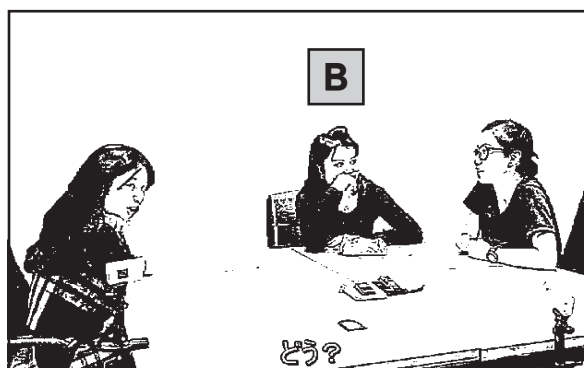


図5-3 舌打ち後：満足げな様子

【2】うれしいときの舌打ち

タイ人の舌打ちは、「うれしい」ときにも現れる。ガッツポーズを伴う形で観察された、「うれしい！」という感情を表す舌打ちを紹介する。この舌打ちが観察された状況は、教師と学生による次のような雑談場面においてである。

《状況》

教師と雑談をしている。

[地名X] への留学が迫ってきていて不安があるなか、偶然にも [地名X] で自分の好きなアイドルのコンサートがあることがわかり、うれしそうにそのことを話す。

舌打ちが観察された発話の生起環境を可視化すると、図6-1のようになる。横の矢印は時間軸に基づく発話の流れで、舌打ちの生起環境を記述している。縦軸では舌打ちが出現した発話に共起する非言語行動によるモダリティの統合関係を記

述している。

図6-1で発話の連鎖をみると、当該学生Sは最初から笑顔である。そして、留学期間中に好きなアイドルのコンサートが偶然 [地名X] で開催されることを教師に「コンサートがあります」と言うとともに、下を向いてガッツポーズをして、腕をそのまま6回ほど揺すりながら舌打ちをして「行きます」とうれしそうに話す。ガッツポーズをしながら、舌打ちをしている様子が図6-2で、舌打ち後の満面の笑みの様子が図6-3である。ガッツポーズを伴った舌打ちは、まさに感情表出系の舌打ちであり、日本語に存在しない、聞いたことのない舌打ちであるといえよう。

以上、【1】と【2】に提示した舌打ちは、ポジティブな感情表出が舌打ちとなって現れた用法である。【3】では副詞的な意味を持つ舌打ちを紹介する。

| | | | | |
|-------|--------|---------------|---------------------|-------------------|
| モダリティ | 表情 | 笑顔 | | 満面の笑み |
| | 視線 | 教師の方を見ている | 下を向く | 顔を上げ、教師の方を見る |
| | ジェスチャー | | ガッツポーズ 6回ほど腕をゆする | |
| | 発話 | コンサートがあります、はい | 私は 舌打ち 行きます | T:行くんですね? S:はい |
| | 時間 → | | | |

図6-1 ガッツポーズを伴った舌打ちの生起環境とモダリティ



図6-2 舌打ち時：ガッツポーズの様子



図6-3 舌打ち後：満面の笑みの様子

【3】「とても」「すごく」の意味が表出する舌打ち

テレビドラマの映像から、3回続けて「チチチ」と発せられる舌打ちの用法を紹介する。3回続けて「チチチ」と発せられるこの舌打ちは、感情の高まりを表出する舌打ちである。この舌打ちが観察された状況は、次のようなシーンである。

《状況》
 父親が腕に怪我をし、娘がその手当のために腕に薬を塗る。

舌打ちが観察された発話の生起環境を可視化すると、図7-1のようになる。横の矢印は時間軸に基づく発話の流れで、舌打ちの生起環境を記述している。縦軸では舌打ちが出現した発話に共起する非言語行動によるモダリティの統合関係を記述している。

図7-1に示すように、父親は娘に薬を塗ってもらっている間、痛いときに発せられるような声

をあげている。そして薬が塗り終わると、大きなため息がもれる。図7-2は舌打ち直前の苦痛の表情、図7-3は舌打ち直後のため息がもれた瞬間を切り取った静止画である。なお、この3回続けて「チチチ」と発せられる舌打ちの意味について、タイ語母語話者に確認したところ、「とても痛いのに、薬を塗られて、すごく痛い!」という意味だという答えがすぐに返ってきた。このことから、3回続く「チチチ」には「とても」や「すごく」のような副詞的な意味があり、感情が高まったときに表出する感情表出系の舌打ちと分類することができる。この舌打ちも日本語に存在しない舌打ちであるといえよう。

4. 3 タイ人の舌打ちの分類と用法

4.1 では認知行動系の2つの舌打ちを、4.2 では感情表出系の3つの舌打ちを例示した。それぞれの舌打ちは、映像を通して、発話と当該発

| | | | | |
|-------|--------|----------------------------|------------|-------------------------|
| モダリティ | 表情 | とても痛そうな表情 | 苦痛の表情 | |
| | 視線 | 腕から視線をはずす | 腕を見る | 腕を見つめる |
| | ジェスチャー | 娘が腕に薬を塗るため、腕を差し出している | 腕に薬を塗ってもらう | (薬を塗り終わり) 腕を曲げたり伸ばしたりする |
| | 発話 | 娘：おとうさん、痛そうね 父：苦痛の声を発する | 舌打ち | (薬を塗り終わり) 大きなため息 |
| | | 時間 → | | |

図7-1 3回続く舌打ち「チチチ」の生起環境とモダリティ



図7-2 舌打ち直前：とても痛そうな様子
 (『บุพเพสันนิวาส』第3話より)



図7-3 舌打ち直後：大きなため息をつく
 (『บุพเพสันนิวาส』第3話より)

話に共起した非言語行動を統合的に捉えて分析した。本稿で取り上げた5種類の日本語に存在しない“苛立ちでない舌打ち”について、その分類と用法を整理した結果を表2に提示する。表中の「意味・機能・共通する特徴」に関しては、萩原・池谷（2015, 2016, 2017, 2018）のこれまでの知見を反映させ記述している。表2は、タイ人の舌打ちの「マルチモーダル性」に基づく分類と用法でもある。

5. まとめと今後の課題

本稿では、発話中に出現するタイ人の舌打ちを、映像データを通して検証し、日本語に存在しない、タイ語文化で使用される舌打ちの事例を具体的に示した。タイ人の舌打ちのモダリティ性は、表2に示したように、用法・意味・機能の違いから「認知行動系」と「感情表出系」とに分けることができる。

舌打ちで発話権は維持され、認知行動系の舌打ちは、フィラー的機能を発揮する一方、感情表出系の舌打ちは、感動詞や副詞のような機能を発揮する。

以上、タイ人にとって舌打ちは、必ずしもネガティブなものではないことを明らかにした。日本人は舌打ちに敏感である。しかし、自文化で不快なものとして解釈される場合であっても、他文化では必ずしもそうではないことを、映像を通して明らかにした。

今後の課題は、これまでの研究成果を踏まえて、タイ語母語話者以外の舌打ちを検討していくことである。まずは2007年当時、非常に非難された朝青龍の舌打ちを分析してみたい。朝青龍の舌打ちは、本当にネガティブな舌打ちであったのか。それとも異文化による違いであったのか。発話と舌打ちとをマルチモダリティの観点から検討してみたいと考えている。

表2 苛立ちでない舌打ちの分類と用法

| 分類 用法 | 〈認知行動系〉 舌打ち | 〈感情表出系〉 舌打ち |
|-------------|---|---|
| 用 法 | 【1】考えるとき 【2】説明する前 | 【1】いい考え！ 【2】うれしいとき 【3】「とても」「すごく」（副詞的） |
| 意 味 | 検討中 | ポジティブ・ネガティブ、何れもあり |
| 機 能 | フィラー的機能を有する | 感動詞や副詞のような機能を有する |
| 発 話 権 | 維持される | 維持される |
| 共通する 特 徴 | <ul style="list-style-type: none"> ・発話に共起する ・単独で出現する場合もある（感動詞や副詞のような用法） ・言語と非言語に二分した場合には非言語に分類されるが、視線・ジェスチャー・表情などの非言語行動と比較した場合、舌打ちはメタ言語的特徴を有するため、発話に近いといえる ・舌打ちは、「非語彙要素」と捉えることができる（→これはWard（2006）の分類に基づくものである） ・言語文化によっては言葉以上にメッセージ性が強い場合がある | |

参考文献

- 清ルミ (2008) 『ナイフとフォークで冷奴—外国人には理解できない日本人の流儀—』太陽出版.
- 高梨克也 (2016) 『基礎から分かる会話コミュニケーションの分析法』ナカニシヤ出版.
- 萩原孝恵・池谷清美 (2015) 「発話にみられる非語彙要素の再検討—タイ人の舌打ちに注目して—」『第10回OPI国際シンポジウム予稿論集』 pp.34-37.
- 萩原孝恵・池谷清美 (2016) 「集中的に舌打ちを發したタイ人日本語学習者の発話に関する一考察」『日本語プロフィシエンシー研究』4号、pp.5-20、凡人社.
- 萩原孝恵・池谷清美 (2017) 「フィラーとの共起にみる舌打ちと笑い—タイ人日本語学習者の発話を表象する非言語行動の特徴—」『2017年第11回OPI国際シンポジウム台湾大会』 pp.96-103.
- 萩原孝恵・池谷清美 (2018) 「苛立たない舌打ち—タイ人のマルチモーダルインタラクション—」ヴェネツィア2018年日本語教育国際研究大会発表資料.
- 坊農真弓・高梨克也 (2009) 「1章 多人数インタラクション研究とは」坊農真弓・高梨克也編『多人数インタラクションの分析法』 pp.7-17、オーム社.
- 森田美里 (2015) 「フランス人には聞こえない舌打ち音—日仏対照言語学的観点から—」『フランス語フランス文学研究』106、pp.159-174.
- 安井永子・杉浦秀行 (2019) 「第1章 相互行為における指さし—ジェスチャー研究、会話分析研究による成果—」安井永子・杉浦秀行・高梨克也編『指さしと相互行為』 pp.3-34、ひつじ書房.
- Ward, Nigel (2006) Non-lexical Conversational Sounds in American English. *Pragmatics and Cognition*, 14 (1), pp.113-184.

謝辞

本研究は、JSPS 科研費 JP19K00580 の助成を受けたものである。

付記

本稿は、2018年8月にイタリアで開催されたヴェネツィア2018年日本語教育国際大会で発表した内容をもとに発展させたものである。

注

- 1) 「J-CAST ニュース」(<https://www.j-cast.com/2007/12/03014073.html?p=all>, 20191026閲覧)。
- 2) 「Chuun Press」(<https://chuun.ctv.co.jp/press/5304/>, 20191028閲覧引用)。
- 3) 当該データは現在、「タイ人日本語学習者学習者話し言葉コーパス」(Corpus of Thai learners' Japanese Conversation: CTJC) として132名分のOPIが収録され公開されている。タイ人の発話に特徴的に現れる舌打ちや笑いといった非言語行動が記載された、タイ人に特化した話し言葉コーパスである (<https://ctjc.siaoyama.ac.jp/index.html>)。
- 4) 「ドイツ語話者日本語学習者話し言葉コーパス」(Spoken Corpus of German Learners of Japanese) は、現在「GLJコーパス version1.0」が公開されている (german-opi.jp/)。
- 5) 高梨 (2016:62) は、「インタラクション (相互行為)」という用語について、「コミュニケーション」は「言語を中心とした意図的なもの」であるのに対し、「インタラクション」は「非言語行動も含み、より意識しにくいやりとりをも含めたより広範なものという違い」があると説明している。
- 6) <https://sripasa.com/buppe-san-nivas>、<https://www.thaich.net/news/20191028is.htm>, 20191031参照。
- 7) 図3-2および図3-3は舌打ちが出現したシーンを切り取ったもので、舌打ちが伴う発話を書き起こして日本語字幕を付記している。以下同様に提示する。